

しも きた かた つか ばる  
**下北方塚原第3遺跡**

老人福祉施設建設にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書

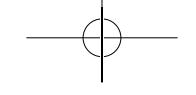


下北方塚原第3遺跡

一〇一四

2014

宮崎市教育委員会



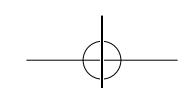
宮崎市文化財調査報告書 第99集

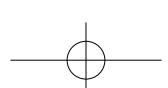
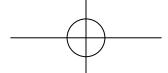
しも きた かた つか ぱる  
**下北方塚原第3遺跡**

老人福祉施設建設にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書

2014

宮崎市教育委員会





## 序 文

本書は平成22年度に、老人福祉施設建設にともない実施された、下北方塚原第3遺跡の発掘調査報告書です。

下北方地区は、この下北方塚原第3遺跡以外にも弥生時代の環濠集落である下郷遺跡、県指定史跡の「宮崎市下北方古墳」や、平安時代の寺院跡が確認された下北方塚原第2遺跡など非常に多くの遺跡が確認されております。現在、本市は、これらの遺跡全体を一括して「下北方遺跡群」としております、下北方地区の埋蔵文化財保護に努めております。

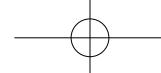
今回調査をおこなった下北方塚原第3遺跡では、古墳時代に宮崎地方を中心として作られた墳墓である地下式横穴が確認され、鉄で作られた刀や農具が出土しました。その他にも、中世の土坑や、縄文土器、江戸時代の建物の跡などが確認されています。様々な時代の人々の生活の痕跡が確認された状況は、まさに本遺跡が所在する下北方地区の歴史の奥深さを示しています。

発掘調査によって、地域の歴史のこれまで知られていなかった新たな一面を知ることができるのは、大変有意義なことです。一方で、その発掘調査は開発により、多くの遺跡が失われていくことが前提であることを忘れてはなりません。私たちは、こうした事実を真摯に受け止め、本市の文化財保護についてみなさんとともに考え、地域の歴史を大切に守り伝えていきたいと思います。

本書が、そうした活動の一つのきっかけとなり、より広く本市の歴史、文化を守り伝えていくことの一助となれば幸いです。

平成26年3月

宮崎市教育長 二 見 俊 一



## 例　　言

1 本書は、宮崎市教育委員会が平成22年度に実施した下北方塚原第3遺跡の発掘調査報告書である。

2 発掘調査は平成23年2月9日から平成23年3月24日までの期間実施した。整理作業は平成25年2月4日から平成25年2月25日までの期間実施した。

### 3 調査組織

調査主体 宮崎市教育委員会

#### 現地調査

総括	文化財課長	田村 泰彦
	副主幹兼埋蔵文化財係長	富永 英典
事務	主　　事	戸高 佑輔
担当	主任技師	西嶋 剛広
	嘱　　託	島井 伸幸
	嘱　　託	川野 誠也

#### 整理作業

総括	文化財課長	田村 泰彦
	副主幹兼埋蔵文化財係長	島田 正浩
事務	主任主事	岩切 瞳
担当	主任技師	西嶋 剛広
	嘱　　託	前田 美恵子

4 本書の執筆、編集は西嶋がおこなった。

5 掲載した図面のうち、現場における実測は西嶋、島井、川野が現場作業員の協力を得ておこなった。遺物の実測は西嶋、前田が整理作業員の協力を得ておこなった。

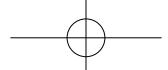
6 現場の写真撮影は西嶋、島井が、出土遺物の写真撮影は西嶋がおこなった。

7 本書の図で示す方位記号はすべて真北を示す。

8 本書で使用する遺構略号は以下のとおりである。

地下式横穴：ST　　掘立柱建物：SB　　土坑：SC　　ピット：SH

9 本調査における出土遺物、実測図、撮影写真などはすべて宮崎市教育委員会で保管している。これら資料の有効な活用を望む。



## 本文目次

第Ⅰ章 遺跡周辺の環境	
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
第Ⅱ章 調査に至る経緯と調査の経過	
第1節 調査に至る経緯	5
第2節 調査の経過	5
第Ⅲ章 調査の成果	
第1節 調査成果の概要	7
第2節 古墳時代の遺構と遺物	7
第3節 中世の遺構と遺物	12
第4節 近世の遺構と遺物	14
第5節 その他の遺構と遺物	18
第Ⅳ章 まとめ	21

## 図版目次

図版1 調査区全景	24
図版2 下北方第22号地下式横穴①	25
図版3 下北方第22号地下式横穴②	26
図版4 下北方第22号地下式横穴出土遺物	27
図版5 土坑1	28
図版6 掘立柱建物	29
図版7 土坑墓①	30
図版8 土坑墓②	31
図版9 土坑2、その他の出土遺物	32

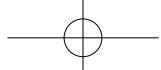
## 挿図目次

第1図 周辺の遺跡	2
第2図 下北方遺跡群	3
第3図 調査区位置図	5
第4図 調査区平面図	8
第5図 下北方第22号地下式横穴実測図	9~10
第6図 下北方第22号地下式横穴出土遺物実測図	11
第7図 土坑1、出土遺物実測図	13
第8図 掘立柱建物1・2平面図	15
第9図 土坑墓1~4実測図、土坑墓4出土遺物写真	16
第10図 土坑墓5~7、土坑墓出土遺物実測図	17
第11図 土坑2実測図	18
第12図 その他の遺物実測図	19

## 表目次

第1表 出土遺物観察表	20
-------------	----





## 第Ⅰ章 遺跡周辺の環境

### 第1節 地理的環境

下北方塚原第3遺跡は宮崎市街地北西部の丘陵上、下北方町塚原に位置する。丘陵は、標高約120mの垂水公園付近を頂部とする垂水台地から南に向かって派生する丘陵で、宮崎層群を基盤とし、その上位に火山灰層が堆積して形成されている。丘陵南端付近の下北方地区は、ほぼ平坦な地形をなしており、この平坦面上に下北方塚原第3遺跡は所在する。周辺の標高は約20mから30mである。また、埋め立てや溜池によって地形を留めていないが、丘陵先端部には平坦面を分割するように深い開析谷が存在していた。

宮崎平野部には都城盆地周辺に源を発し、宮崎平野部を貫流しながら太平洋へと注ぐ大淀川が流れている。大淀川は宮崎平野部において幾度か流れの向きを変えるが、遺跡の所在する丘陵西側は、大淀川が東から南へと流れを変える地点である。この下北方地区は、南部に広がる宮崎市街地を一望でき、西には遠く霧島連山を望むことのできる眺望の地でもある。これに加え、古代においては、丘陵南側を流れる大淀川の河川交通や、北方の西都市方面や西方の綾町方面へと向かう幹線道が交わる地点であるという交通の要衝としての側面も持つ地域である。調査地はこの丘陵縁辺部に位置し、眼下に大淀川を望むことのできる場所である。

### 第2節 歴史的環境

宮崎市域には多数の遺跡が存在する。中でも台地または丘陵上、海岸沿いに発達した砂丘上に集中する傾向があるが、近年では低湿地での調査事例が増加しつつあり、その成果にも注目が集まっている。下北方丘陵南端部はその中でも遺跡の密集する地区であり、その密度は市内でも随一の高さである。現在はこの地域を一括して「下北方遺跡群」と呼称しており、旧石器時代から近現代に至るまで通時的な人々の生活の痕跡が確認されている。

下北方地区の旧石器、縄文時代については、遺構、遺物の検出が少なく、旧石器時代の剥片尖頭器、三稜尖頭器や、縄文時代早・中・後期の土器が出土した下郷遺跡が知られている程度である。しかし、丘陵北方の垂水台地上には垂水第1・2遺跡や金剛寺原第1・2遺跡など旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡が点在しており、下北方地区周辺においても当該時期の人々の生活が営まれていたことは疑いがないだろう。

弥生時代になると、下郷遺跡において環濠集落が形成される。近畿地域からの影響が指摘される絵画土器をはじめ多くの遺物が出土しており、宮崎平野部で確認されている他の環濠集落と合わせて、地域の拠点的な集落として機能していたと考えられる。下郷遺跡東側の低地では、弥生時代前期末から中期初めの溝状遺構や旧河道が確認され、木製農具や漁具のほか、炭化米の付着した土器片などが検出された垣下遺跡などが所在している。

古墳時代前期に位置付けられる遺跡はこれまで周辺では確認されていない。この時期には、大淀川をはさんだ対岸にある生目古墳群において大型古墳が築造され、有力な首長墓系譜が形成されている。その後、古墳時代中期中葉から後期にかけては下北方地区に下北方古墳群の築造が開始され、大淀川下流域で最も有力な首長墓系譜を形成する。この下北方古墳群は、前方

第2節 歷史的環境

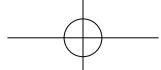


第1図 周辺の遺跡



番号	遺跡名	所在地	主な時代	番号	遺跡名	所在地	主な時代	
1	下北方塚原第3遺跡	下北方町塚原	古墳・近世	17	下北方2号墳	下北方町塚原	古墳	
2	花切第1遺跡	下北方町花切	古墳・古代	18	下北方3号墳	下北方町塚原	古墳	
3	花切第2遺跡	下北方町花切	古墳・古代	19	下北方4号墳	下北方町塚原	古墳	
4	下北方塚原第1遺跡	下北方町塚原	古墳・古代	20	下北方5号墳	下北方町塚原	古墳	
5	下北方塚原第2遺跡	下北方町塚原	古墳・古代	21	下北方6号墳	下北方町塚原	古墳	
6	下郷第2遺跡	下北方町下郷	古代・近世	22	下北方7号墳	下北方町塚原	古墳	
7	下郷第3遺跡	下北方町下郷	古墳・古代	23	下北方8号墳	下北方町塚原	古墳	
8	下北方5号墳周辺遺跡	下北方町塚原	古墳・古代	24	下北方9号墳	下北方町塚原	古墳	
9	下郷第4遺跡	下北方町下郷	古墳・古代	25	下北方10号墳	下北方町塚原	古墳	
10	下北方1号墳周辺遺跡	下北方町塚原	古墳・古代	26	下北方11号墳	下北方町塚原	古墳	
11	戸林第1遺跡	下北方町戸林	古墳・古代	27	下北方12号墳	下北方町塚原	古墳	
12	横小路遺跡	下北方町横小路	古墳・古代	28	下北方13号墳	下北方町越ヶ迫	古墳	
13	平和台下遺跡	下北方町下郷	不明	29	下北方14号墳	下北方町越ヶ迫	古墳	
14	下郷遺跡	下北方町下郷	弥生	30	下北方15号墳	下北方町花切	古墳	
15	大宮中学校校庭遺跡	下北方町横小路	弥生	31	下北方16号墳	下北方町高下	古墳	
16	下北方1号墳	下北方町塚原	古墳	※図中の点線が下北方遺跡群の範囲を示す。				

第2図 下北方遺跡群 (S= 1/10,000)



## 第2節 歴史的環境

後円墳5基、円墳12基、地下式横穴25基が確認されている古墳群で、円墳、前方後円墳については調査事例が少なく詳細不明な点が多い。地下式横穴では、金製垂飾付耳飾、鉄製甲冑、馬具をはじめとする豊富な副葬品が出土した下北方地下式横穴第5号など調査事例が多く、宮崎平野部における地下式横穴のあり方を知る上で重要な情報を提供している。古墳時代後期になり、越ヶ迫丘陵上に下北方13号墳が、丘陵下に船塚古墳が築造されて以降、下北方古墳群は古墳の築造を停止するが、周辺の丘陵斜面に瓜生野村古墳、池内横穴群など多くの横穴群が形成される。集落の様相については明らかでない点が多いが、下郷第4遺跡や下北方塚原第2遺跡では後期の住居跡が確認されており、古墳群に近接した位置に集落が営まれていたことが推察される。

古代については、下北方塚原第2遺跡で古代寺院跡が確認され、大型の掘立柱建物や、それにもともなって素弁八葉蓮華文軒丸瓦をはじめとした瓦など多くの遺物が確認された。このほかにも、住居跡、掘立柱建物などが確認され、コップ形の須恵器が出土した下郷第4遺跡や、道路状遺構の可能性もある、東西方向で平行に伸びる2本の溝状遺構が確認された下北方塚原第1遺跡などがある。これら遺跡からは、金属器生産にかかわる遺物も確認されていて、古代において下北方丘陵上には寺院のほかに、工房や郡衙など古代宮崎郡の中心となる重要な施設が存在したことを強く示唆している。

中世の様相については不明な部分が多い。ただし、丘陵北側の池内地区に宮崎城跡が所在している。宮崎城は、南九州に特徴的な館屋敷式山城と呼ばれる構造をもつ山城で、南北朝時代の『日向記』、『土持文書』における建武3（1336）年の記載が文献上の初見である。その後、長く伊東氏と島津氏の抗争の舞台となり、豊臣秀吉による国割の後には宮崎城を含む一帯は延岡を支配していた高橋氏領となった後、江戸時代に入った元和元（1615）年の一国一城令をもって廃城となる。この宮崎城で注目されるのが、島津氏時代に城主であった上井覚兼による『上井覚兼日記』である。その詳細な記述内容と、保存状態の良好な遺構の両者を対比できることが宮崎城跡をして中世山城研究上稀有な存在たらしめている。

近世においても下北方周辺は引き続き延岡藩の飛び地となっており、延岡藩代官所が置かれていた。代官所は、現在の大宮中学校がある地点に存在したと言われている。下北方丘陵南端の平坦面上には、近世の遺構が確認されており、当該時期に代官所を中心に屋敷地などが広がっていたものと考えられる。このことは、近世においても当地域が宮崎の歴史、政治の中心地であったことを示している。

近現代になると、政治の中心地は現在の宮崎市街地へと移っていく。それによって下北方地区はその重要性を失っていったかのように見える。しかし、昭和15（1940）年に八紘一字の塔（現在の平和の塔）、神武天皇の寓居跡と伝えられる皇宮神社には皇軍発祥の地碑が建立される。これらは皇紀2600年事業の中で建造・建立されたもので、その現在的位置付けは別としても近現代日本史を知る上で重要な意味を持つものと言えよう。

下北方地区における以上のような通時的かつ重層的な歴史の積み重ねからは、当地域が、長い歴史の中で、常に周辺地域の中で中心的な役割を担ってきた地域であることがわかる。つまり、下北方塚原第3遺跡が所在する下北方地区周辺は、宮崎平野部の歴史を紐解く上で、欠かすことのできない、極めて重要な地域であるということができる。

## 第Ⅱ章 調査に至る経緯と調査の経過

### 第1節 調査に至る経緯

平成22年7月1日、老人福祉施設の建設とともに、宮崎市下北方町塚原5711番地1、4、5および5702番地4における埋蔵文化財所在の有無について照会がなされた。当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である「下北方遺跡群」の域内にあるため、平成22年7月22日に埋蔵文化財の有無を確認するための確認調査をおこなった。その結果、調査地内において地下式横穴と思われる遺構や柱穴や、それらにともなって土器片などが検出され、埋蔵文化財の存在が確認された。

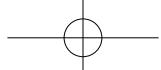
そのため、事業者と埋蔵文化財の取り扱いに関する協議を重ねたが、施設建築の工法などの兼ね合いから、残念ながら遺構の破壊を避けることができなかった。したがって、施設の建築とともに、遺構にまで影響の及ぶ範囲である約471平方メートルを対象として本発掘調査を実施することになった。現地での発掘調査は平成23年2月9日から平成23年3月24までの期間実施した。現地調査後の整理作業は平成25年2月4日から平成25年2月25までの期間実施した。

### 第2節 調査の経過

調査地は、調査前において、宅地などに利用されていた。調査はこれらの取り壊しの後に、施設建設とともに遺構に影響の及ぶ範囲である部分に調査区を設定し、合計471平方メートルの本発掘調査を実施した（第3図）。



第3図 調査区位置図 (S= 1/2,000)



## 第2節 調査の経過

調査はまず、重機による表土除去作業からおこなった。調査区内においては、近世以降のものと見られる造成土が堆積しており、これらの除去をおこなったが、最も深い部分で現地表面から約1.5mほども堆積していた。このことは、当地がいずれかの時期に大きく土地の改変を受けていることを示している。改変は調査区の大部分に及んでおり、調査区西側の一部にのみ削平を受けていない箇所が残存していた。今回の調査では、この造成土を除去した地山面上で遺構検出をおこなったが、近世の遺構のうちいくつかはこの造成土のいずれかの面から掘り込まれている可能性が確認された。

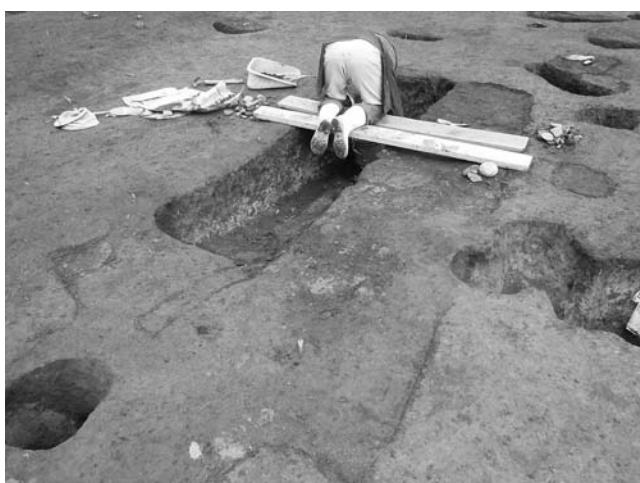
表土除去後には、遺構検出作業をおこなった。遺構は調査区全体に分布している状況で、古墳時代の地下式横穴、中世の土坑、近世の土坑墓、掘立柱建物、ピットなどの遺構が確認され、検出された遺構から順次、発掘作業員による掘削作業を実施した。

掘削の進んだ遺構から、記録作業を実施した。記録作業は、調査員の手測りによる実測作業、トータルステーションを用いた遺構実測作業、35mmフィルムカメラ、中判フィルムカメラ、デジタルカメラを用いた写真撮影によった。合わせて、調査区周辺の状況、調査地全体の様子を記録するために、空中写真撮影もおこなった。

調査終了後には、重機を用いて、調査によって排出した土の埋め戻し作業をおこない、調査前の状況に復旧し、現地における発掘調査を終了した。



調査の状況1



調査の状況2

## 第Ⅲ章 調査の成果

### 第1節 調査成果の概要

今回の調査で確認された遺構は、古墳時代の地下式横穴1基、中世の土坑1基、近世の土坑墓7基と掘立柱建物2棟などがある。調査地の大部分で近世以降に大規模な土地改変がおこなわれており、その影響で本来調査地周辺に堆積している黒ボク土やアカホヤ火山灰層など、AT上位に堆積する暗褐色土層以上の土層が消失していた。また、遺構も削平されているものがあり、特に地下式横穴は床面付近が残存しているのみで、天井部など大部分が失われた状況であった。遺物は各遺構から出土しており、地下式横穴からは鉄刀とU字形鍬鋤先が、そのほか各遺構にともなって土器片や陶磁器片、銅錢などが出土した。また、調査区西側の土地改変の影響を受けていない箇所では、縄文時代早期の土層から塞ノ神式土器や黒曜石の微細な剥片が検出された。

### 第2節 古墳時代の遺構と遺物

#### 地下式横穴

**下北方第22号地下式横穴（第5、6図）** 調査区南端付近で確認された。下北方古墳群で22番目に確認された地下式横穴であることから、下北方第22号地下式横穴と呼称する。本地下式横穴は、近世以降の土地改変によって大きく削平されており、玄室床面から約0.6mの高さまでが残存するのみで、天井部などは完全に失われていた。残存部分については、壁面の剥落などもなく、遺存状態は良好であった。以下、残存部分について記述を進める。

竪坑は現況部分において不整橿円形で、規模は長さ1.4m、幅1.5m、検出面からの残存深は0.5mである。羨道に対して長軸方向がわずかに屈曲している。前壁右側から右側壁にかけては、曲線的な形状で、しっかりと角を持つ左側壁側と異なった形状である。竪坑右側壁から後壁にかけては竪坑底面から高さ約30cmの高さで掘り残され、階段状に仕上られた部分が存在する。これは、竪坑へと昇降するステップの一部と考えられる。竪坑底面は平坦でごくわずかに羨門側に向かって傾斜している。

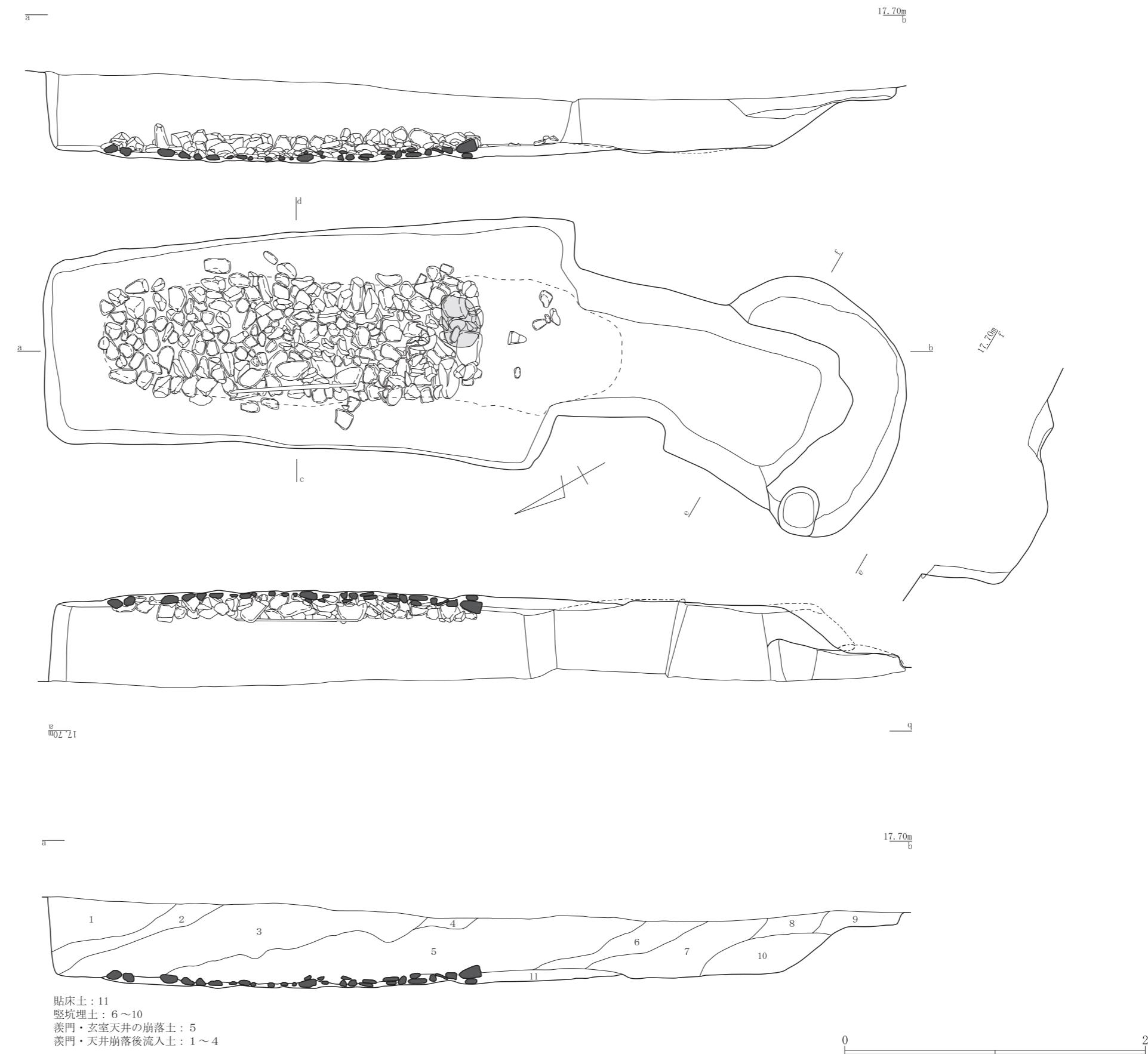
羨道は竪坑から玄室に向かってわずかに幅が広がる形態で、検出面における幅は竪坑側で0.85m、玄室側で1.0mである。床面幅も同様で、竪坑側で0.55m、玄室側で0.7mである。断面形態は現状で逆台形状になっている。羨門付近には、閉塞に関わると見られる石材や粘土などが確認できなかった。このことから、本地下式横穴の閉塞は、板状の有機質素材をもっておこなわれていたものと推定できる。板状素材を設置するための掘りこみなども確認することができなかった。

玄室は妻入り構造で、平面形態が奥壁側より羨門側の幅が広い台形状となっている。玄室の規模は、奥行きが3.4m、幅が奥壁側で1.0m、羨門側で1.5mである。また、検出面から玄室床面までの深さは0.6mである。各壁のラインは直線的で、角もしっかりと作りこまれている。また壁面も丁寧に整えられており、全体的に精美な印象を受ける。壁面を精査したが、掘削時の工具痕跡と明確に認めうるものは確認できなかった。玄室中央には、屍床が設置されている。

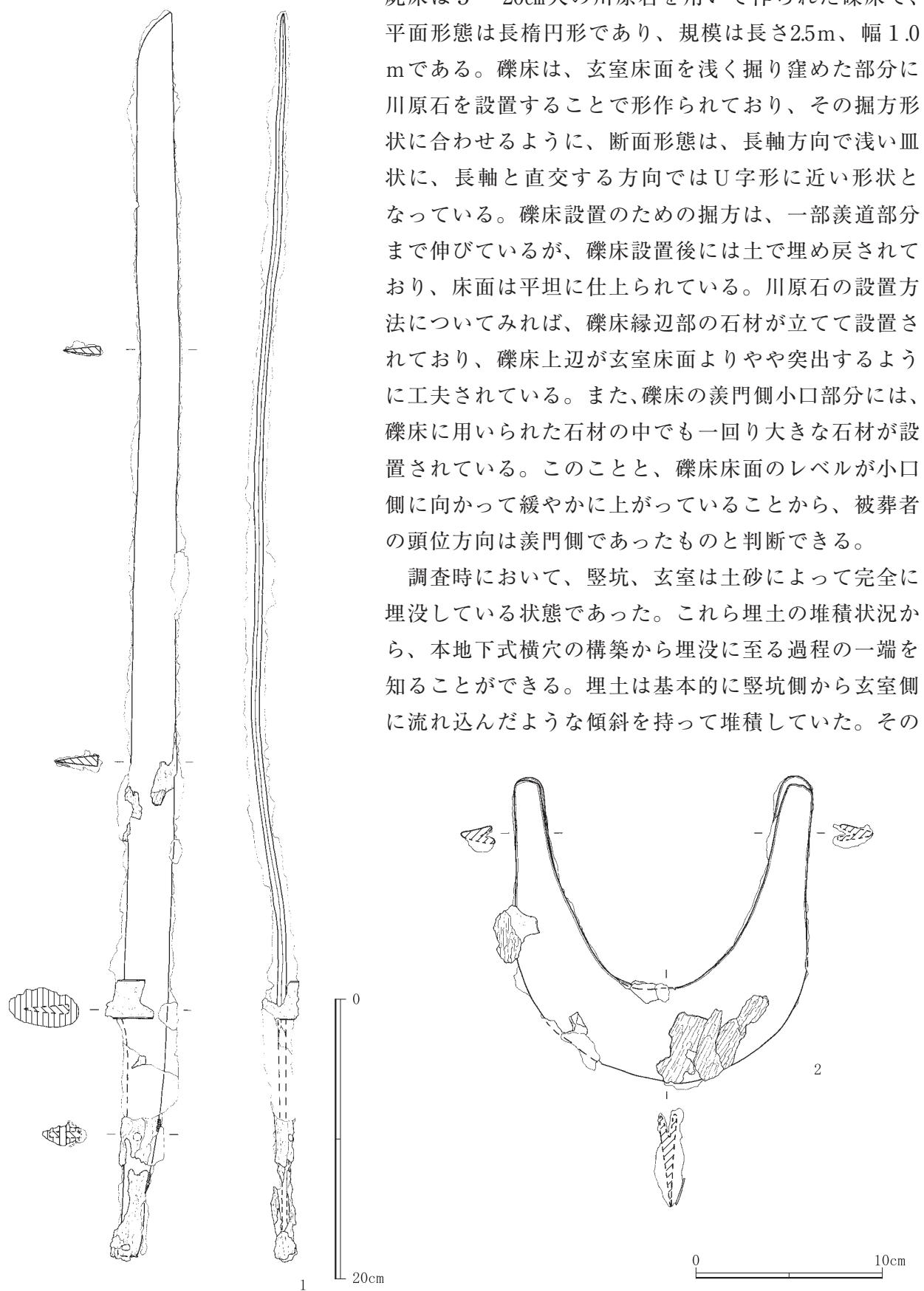
第2節 古墳時代の遺構と遺物



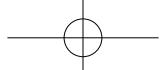
第4図 調査区平面図 ( $S=1/150$ )



第5図 下北方第22号地下式横穴実測図



第6図 下北方第22号地下式横穴出土遺物実測図



### 第3節 中世の遺構と遺物

中で最も鍵になる土層が、5層である（第5図）。5層は、混じりのない地山層であることから羨門、天井の崩落にともない、その崩落土が玄室内に堆積したものと判断される。したがって、この5層より下層で、竪坑側に堆積している土層は、竪坑埋土が羨門、天井崩落以前に流入した土であり、5層より上層で玄室奥壁側に堆積している土層は天井崩落後の流入土であると考えられる。このことからは、この地下式横穴は、閉塞していた板状素材の腐朽後に竪坑内の埋土が玄室内に流入、その後、羨門部、天井部が崩落し、その崩落により形成された空洞に、黒ボクを中心とする土層が堆積するという埋没過程を復元できる。また、崩落した天井部の地山土は、AT直上とその上の土層であった。調査地の土層堆積状況から想定すれば、本地下式横穴の天井高さはおおむね1m程度であったものと思われる。

地下式横穴の構造と規模の割には、副葬品は少なかった。本地下式横穴から検出された古墳にともなう遺物は、鉄刀とU字形鍬鋤先、刀子のみである。他に埋土中から縄文土器、石器が検出された。鉄刀は礫床内の左側辺側で検出された。切先が玄室奥壁方向に向けられており、このことも上述の礫床の状況とともに被葬者の頭位方向の判断材料となる。鉄刀は、長さ90.0cmで刀身部長72.5cm、刀身幅は最大で3.1cm、刃部厚は0.6cm、茎部長さは17.5cmである。刀身は断面三角形の平造で、関は片関で、鎌の影響で判然としないが、斜関と思われる。茎部は茎元から茎尻に向かって幅狭になり、茎尻は丸くおさめられている。茎の中ほどに目釘孔があり、目釘が貫通していることが確認できる。刀身にはわずかに鞘の木質が残存しているが、その形態は判然としない。茎部には把を構成する有機質がわずかに残っており、その形態から、落とし込み式B類（豊島2010 p.93）であることがわかる。把間に巻かれた組紐は、二本芯並列コイル状二重構造糸巻き（沢田2008 p.6）である。U字形鍬鋤先は、礫床内の羨門寄りで検出された。ちょうど被葬者の胸付近に当たる場所と推測される。耳部から刃部にかけてはわずかに内湾し、刃部との境は不明確である。全長が16.2cm、幅が15.9cm、厚さはおおむね0.9cmである。耳部幅に比べて刃部幅が広い。鎌の影響でV字溝の深さは不明確である。製作方法についても不明確ではあるが図の表面側よりも裏面側の上辺ラインがわずかに大きく、2枚の鉄板を鍛接することで製作されている可能性がある。形態的特徴は、魚津知克による分類のA3b類に該当する（魚津2003 pp.30-31）。その他、図示していないが、礫床内で刀子小片が確認された。

本地下式横穴の時期的位置付けについては、出土遺物が少ないながら、落とし込み式B類の把構造を持つ鉄刀、A3b類のU字形鍬鋤先の年代観から、古墳時代中期中葉から後葉、5世紀中頃から末にかけてと捉えることができる。宮崎平野部において、本地下式横穴と同様の形態的特徴をもつ、玄室が大形で妻入り構造の地下式横穴は、5世紀後半代に多く見られることもこの年代観と矛盾しない。

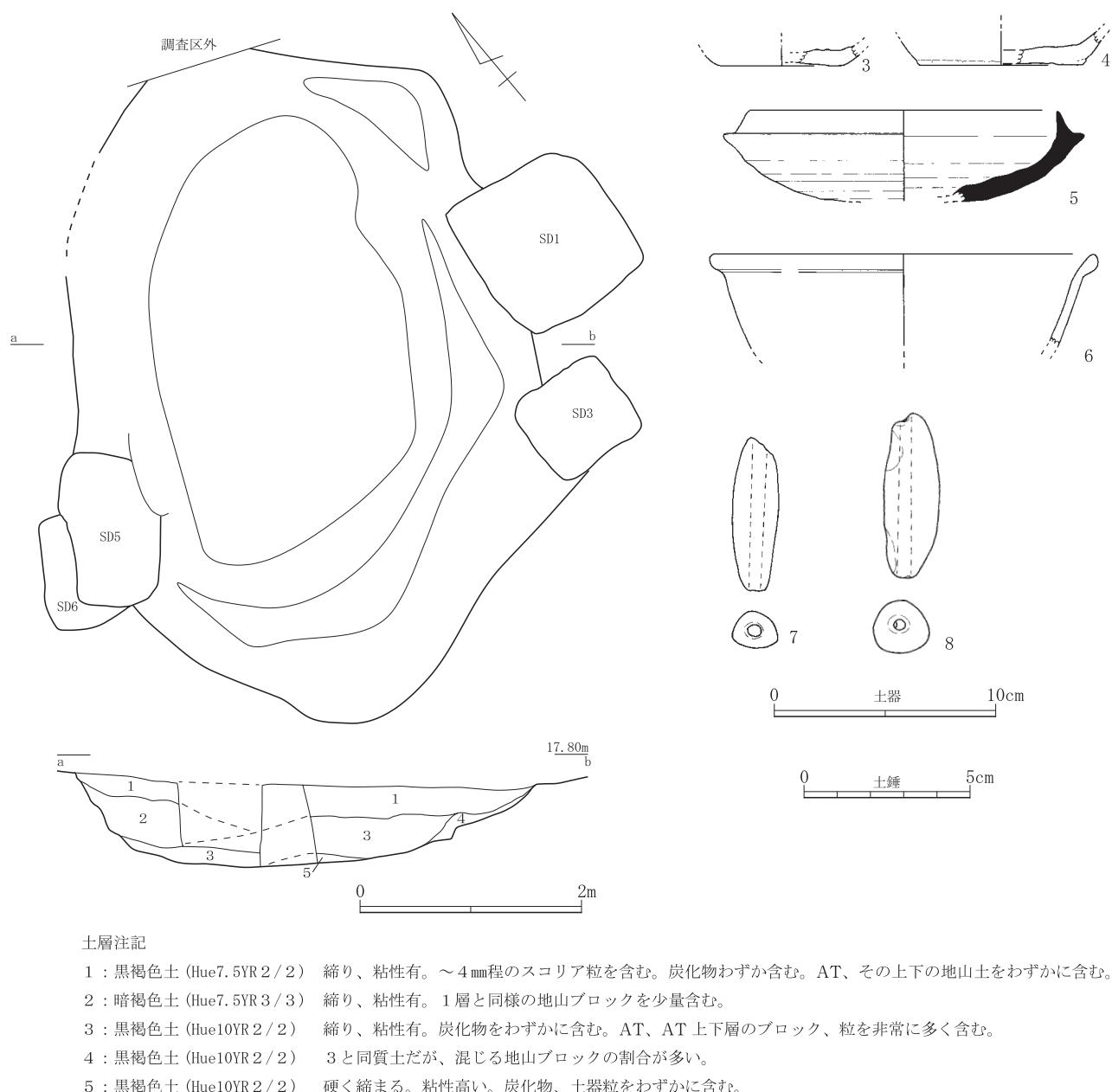
### 第3節 中世の遺構と遺物

#### 土坑

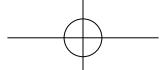
**土坑1**（第7図） 調査区北西側で検出された。土坑墓1、3、5、6に切られており、一部がわずかに調査区外へ伸びている。非常に大型の土坑で、平面形態は、南北方向に長い不整橜円形である。規模は、長さ6.25m、幅4.2m、検出面からの深さは0.75mである。調査区全体が、近世以降に大きく削平を受けていることから、本土坑も本来はより深く、より大型の土坑であつ

たと考えられる。また、土坑東側には段があり、テラス状になっている。断面形態は立ち上がりの緩やかなU字形であるが、テラス部分は階段状になっている。

遺物は土師器片を中心に出土したが、その多くが小片であった。第7図に図示可能であった遺物を掲載している。3、4は土師器坏の底部片である。3は糸切り底、4はヘラ切り底である。5は須恵器坏身である。6は青磁の碗である。口縁部は丸く肥厚し外方向かって屈曲している。7、8は土錘である。本遺構の時期は土師器坏、青磁の年代から中世に位置付けられると考えられる。



第7図 土坑1、出土遺物実測図



#### 第4節 近世の遺構と遺物

##### 第4節 近世の遺構と遺物

###### 掘立柱建物（第8図）

**掘立柱建物1** 調査区中央付近で検出された。桁行2間、梁行1間の側柱建物で、主軸方向はN75°Wである。掘立柱建物2と切り合い関係にあるが、先後関係は明らかでない。規模は桁行3.8m、梁行3.9mで、平面形態はおおむね正方形に近い。柱掘方の形態はいずれも円形で、規模は、0.4～0.7mである。柱掘方間の間隔は桁行側で約2.0m、梁行側で約4.0mである。柱筋は北辺の一部が乱れている。

柱掘方埋土から近世陶磁器の小片が出土している。

**掘立柱建物2** 調査区中央付近で検出された。柱掘方が幾度も掘り直されているよう、柱掘方の対応関係の判断が難しいが、おそらく、桁行3間、梁行2間の側柱建物であると考えられる。主軸方向はN74°Wである。規模は、桁行6.5～7.0m、梁行5.5mで、東西方向に長軸をとる平面長方形の建物である。柱掘方の形態は円形のものと、かなり不整形になるものがある。規模は、最も小さいもので0.7m、最大のもので1.6mである。柱掘方の間隔は、切り合いや掘り直しによる重複が多く、判然としない。柱筋は桁行方向ではおおむね直線的であるが、梁行方向ではいびつである。

柱掘方の埋土から、近世陶磁器の小片が出土している。

###### 土坑墓（第9・10図）

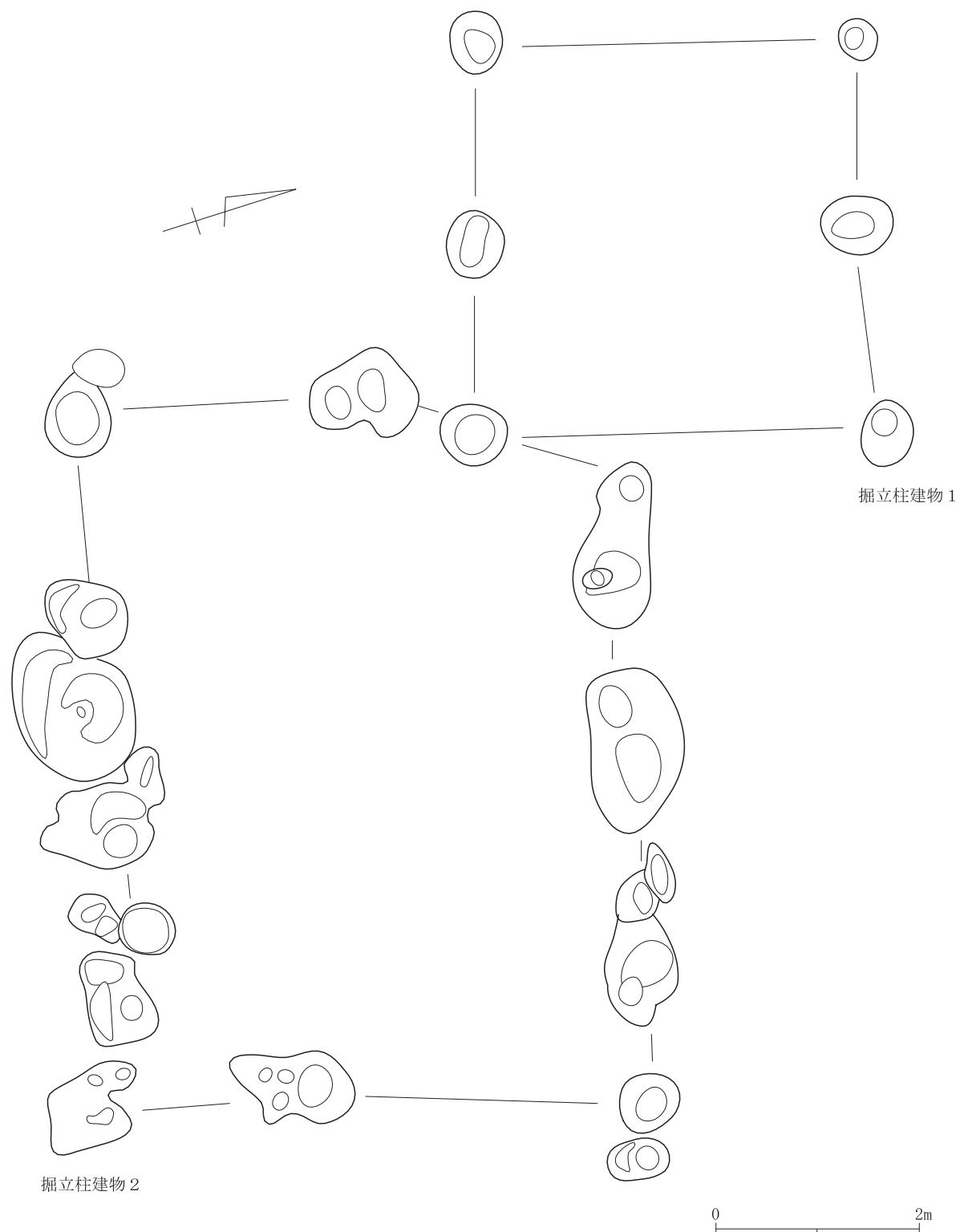
**土坑墓1** 調査区北西側で検出された。平面形態が正方形の土坑墓で、規模は東西1.4m、南北1.4mである。検出面からの深さは、1.25mである。底面は平坦に仕上られており、底面から壁面への立ち上がりは垂直に近い角度で立ち上がっているが、わずかに外方に向かって広がっている。土層の堆積状況の確認から、棺が設置されていた状況が確認できた。棺は土坑のほぼ中央に設置されており、棺腐朽後に流入した土の平面形態から、棺は断面形が円形に近いものであったと思われる。棺設置後には、黒褐色の土で埋め戻されていた。

棺内の土坑底面付近には、銅錢と骨粉らしきものが検出された。そのほかに棺を留めていたと思われる鉄釘や、キセルの雁首が出土した。

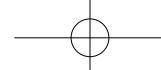
**土坑墓2** 調査区北西側で検出された。一部を土坑墓1に切られている。平面形態は南北方向に長い隅丸長方形で、規模は、東西現存0.55m、南北0.9mと小規模である。検出面からの深さは0.4mである。底面は平坦で、壁面は垂直に近い角度で立ち上がっている。棺の痕跡などは確認することができなかった。

土坑内からは寛永通宝が7枚と鉄釘が出土した。

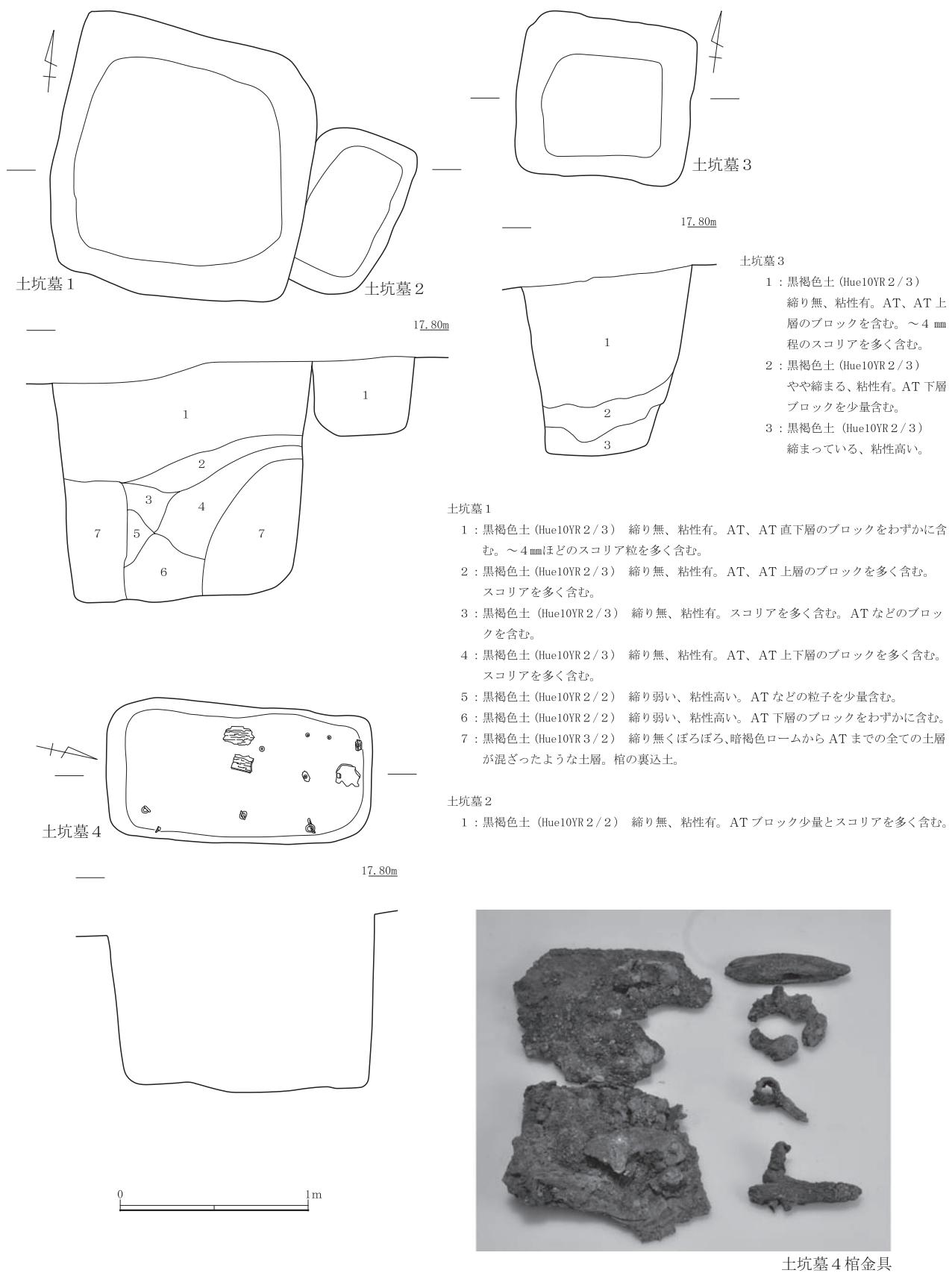
**土坑墓3** 調査区北西側で検出された。平面形態が正方形の土坑墓で、規模は東西0.95m、南北0.9mである。検出面からの深さは1.0mである。底面はほぼ平坦で、側壁は底面から急角度でわずかに外方に広がりながら立ち上がっている。棺の痕跡などは確認することができなかった。



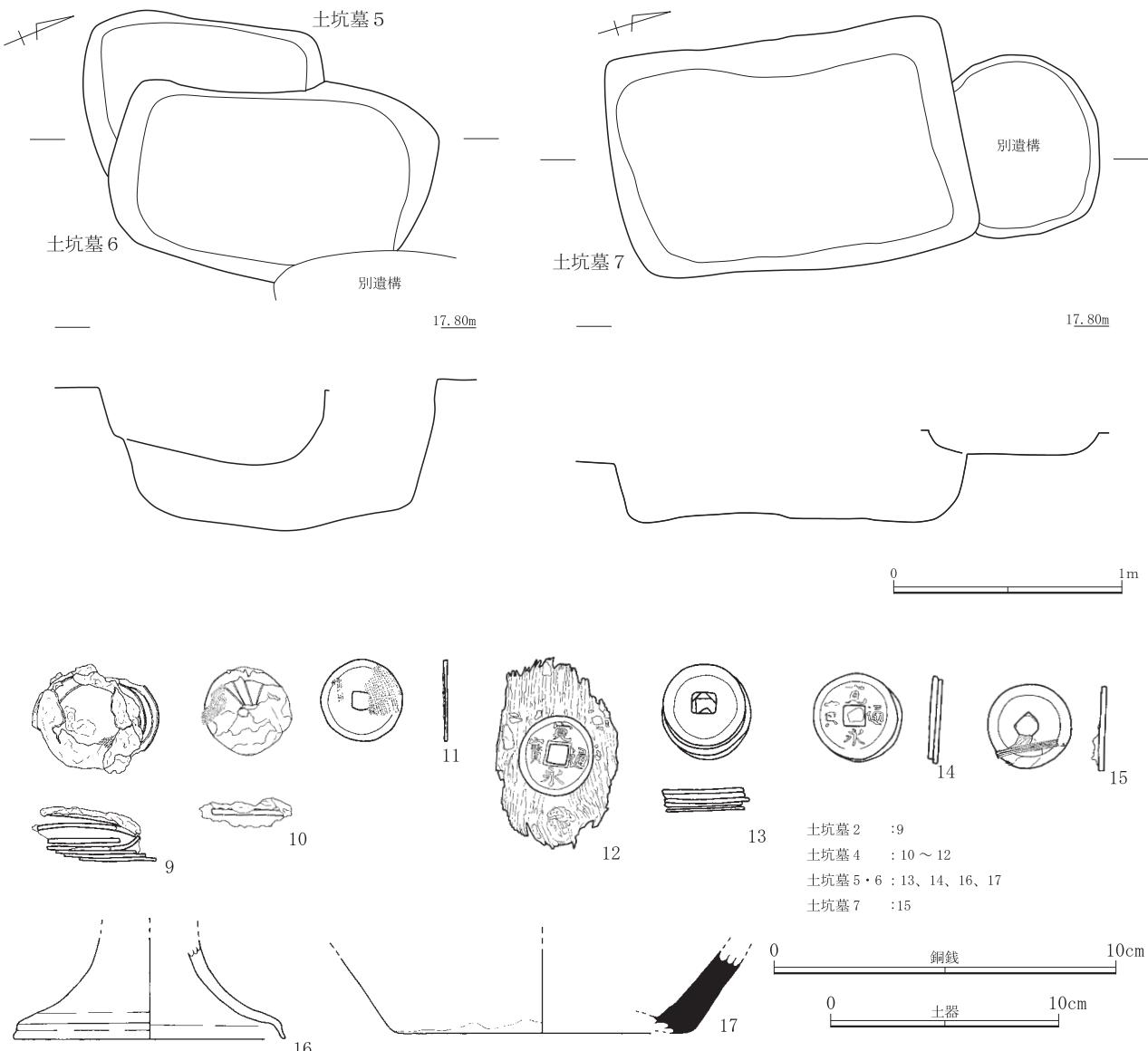
第8図 掘立柱建物1・2平面図



#### 第4節 近世の遺構と遺物



第9図 土坑墓 1～4 実測図、土坑墓 4 出土遺物写真



第10図 土坑墓5～7、土坑墓出土遺物実測図

土坑からは銅製の笄が1点出土した。断面形態が方形で、先端に向かって細くなる、ちょうど箸のような形態である。この存在は、被葬者が女性であったことを示唆している。

**土坑墓4** 調査区北西側で検出された。平面形態が隅丸長方形の土坑墓で、規模は南北1.4m、東西0.76mである。検出面からの深さは0.98mである。底面は平坦で、側壁は底面からほぼ垂直に近い角度で立ち上がっている。本土坑墓では、棺本体は腐朽していたものの、棺金具が確認された。出土状況から、金具は原位置に近い場所で検出されたと考えられる。この位置関係から、棺は縦横が土坑掘方の規模に近い大きさであったと思われる。棺は棺身に蝶番状の輪金具で連結された蓋が取り付けられ、棺前面に身と蓋を閉じて固定する板状の金具が取り付けられたものであったと判断できる。何らかの木製容器を棺に転用したものである可能性がある。

土坑墓4からは、その他に銅錢が8枚出土している。



## 第5節 その他の遺構と遺物

**土坑墓5** 調査区北西側で検出された。約半分を土坑墓6に切られているが、平面形態は隅丸長方形で、南北に長く、長さ1.05m、幅が現存部分で0.7m、検出面からの深さが0.22mである。土坑墓6に切られているため現存しないが、底面はおおむね平坦であったと思われる。棺の痕跡などは確認できなかった。

出土遺物は、土坑墓6と混在しておりその帰属が明らかでないが、両者合わせて11枚の銅錢と、陶磁器片、須恵器片が出土している。

**土坑墓6** 調査区北西側で検出された。一部を別遺構に切られているがほぼ全体形を知ることができる。平面形態はやや不整形な隅丸方形で南北に長く、規模は長さ1.4m、幅0.9m、検出面からの深さは0.64mである。底面はわずかに中心部が窪む形態であるが、おおむね平坦である。

**土坑墓7** 調査区東寄りで検出された。他の6基の土坑墓とやや離れた位置にあたる。平面形態は隅丸長方形で、南北に長く、長さ1.54m、幅1.02m、検出面からの深さが0.3mである。底面は平坦で、側壁は外方に広がりながら立ち上がっている。

土坑墓内からは、銅錢が5枚出土した。

## 第5節 その他の遺構と遺物

### 時期不明の遺構

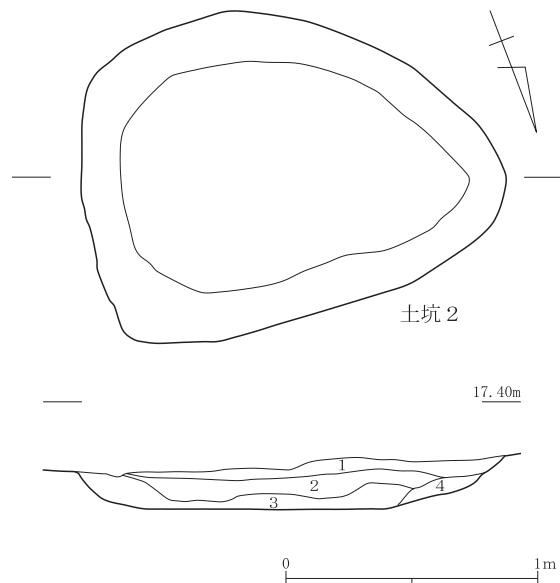
#### 土坑

**土坑2** (第11図) 調査区南東寄りで検出した。平面形態が不整橢円形の土坑で、底面はおおむね平坦で、断面形態は浅い皿状である。規模は、長さ1.7m、幅1.3m、検出面からの深さが0.2mである。

本遺構からは、遺物は出土しなかった。

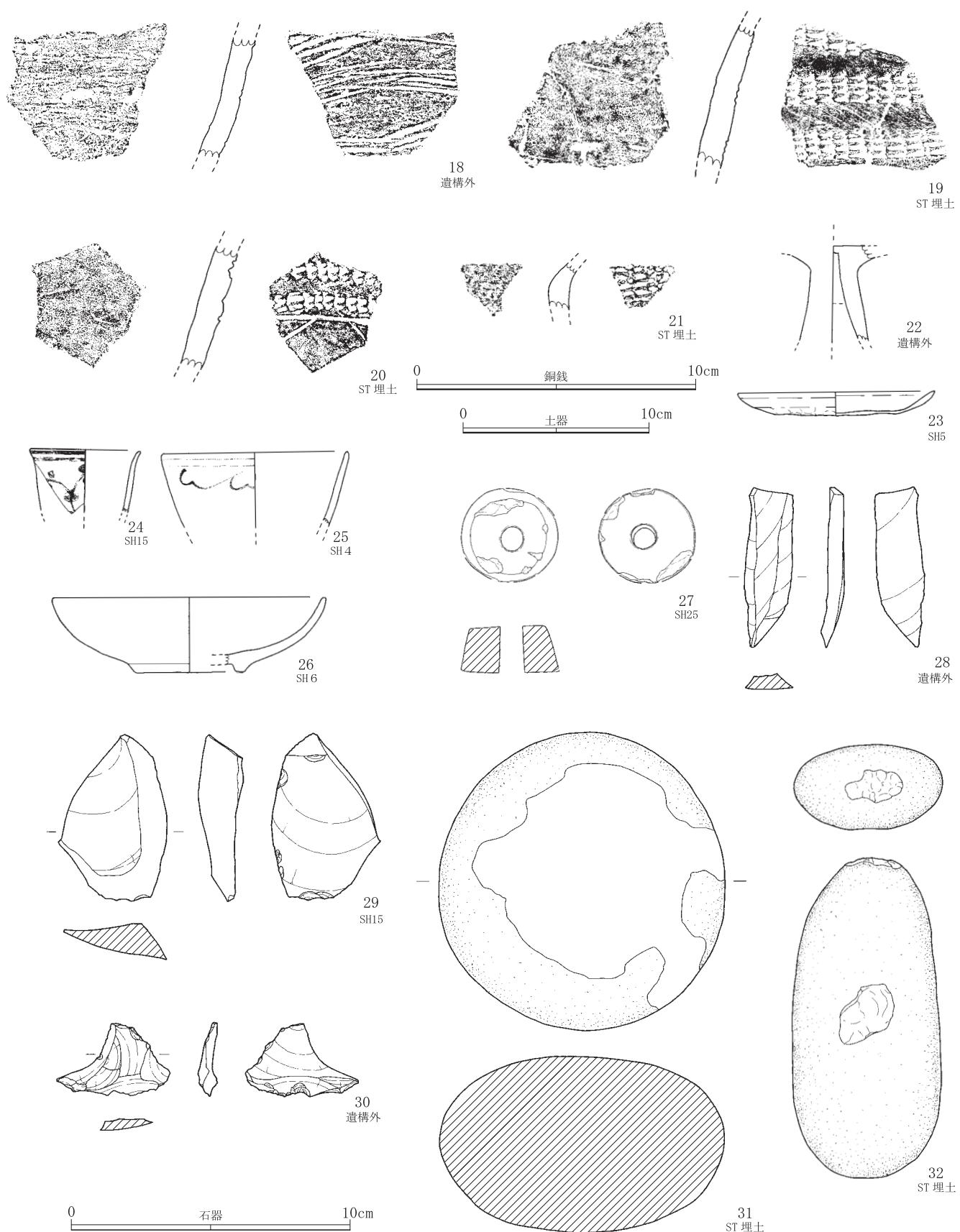
### その他の遺物 (第12図)

今回の調査ではピットや遺構外などからも一定量の遺物が出土している。そのうちの主なものについて第12図に図示した。18～21は縄文土器である。いずれも塞ノ神式土器で、外面に条痕文や貝殻による連続刺突文が施されている。22は土師器高壺の脚部片である。23は土師器皿で非常に薄手の作りである。24～26は磁器である。24は小杯、25、26は碗である。27は石製の紡錘車で断面形が台形状である。28～30は剥片である。28、29は頁岩、30は姫島産黒曜石と思われる。31は磨石である。上面の広い範囲に磨面が認められる。32は敲石である。上面と小口側に敲打痕跡が認められる。

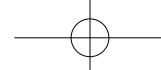


土層注記  
 1 : 暗褐色土 (Hue7.5YR3/3) 締まり、粘性有。5～10mmの地山ブロックを含む。  
 2 : 褐色土 (Hue7.5YR4/3) 締まり、粘性有。1～2mmの地山ブロックわずかに含む。  
 3 : 黒褐色土 (Hue7.5YR3/2) 締り、粘性有。2mmほどの地山ブロックを含む。  
 4 : 褐色土 (Hue7.5YR4/4) 締り無し、粘性有。2cmほどの地山ブロックを多く含む。

第11図 土坑2実測図



第12図 その他の遺物実測図



## 第5節 その他の遺構と遺物

第1表 出土遺物観察表

掲載頁 図番号	番号	遺構等	種別 器種	法量 cm ( ) : 復元推定値			色調		焼成	調整		胎土(上: ■ 下: □)		備考	実測 番号		
				口径	底径	器高	外 面	内 面		外 面	内 面	A	B	C	D		
第6図	1	地下式 玄室	鉄器 鉄刀	90.0	3.1	0.6	—	—	—	—	—	780 g		装具有機質付着	38		
	2		鉄器 鍔鋒先	16.2	15.9	0.9	—	—	—	—	—	180 g					
第7図	3	土坑 1	土師器 壺	—	(5.4)	—	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	橙 Hue7.5YR7/6	良	回転ナデ	回転ナデ	微 僅	—	—	—	糸切底	7
	4		土師器 壺	—	(7.2)	—	橙 Hue5YR6/6	橙 Hue5YR6/6	良	回転ナデ	回転ナデ	—	—	—	—	ヘラ切り底	6
	5		須恵器 壺身	(13.6)	—	(4.2)	灰 Hue7.5Y6/1	灰 Hue7.5Y6/1	堅緻	回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ	1 僅	—	—	—	—	16
	6		青磁 碗	(17.4)	—	—	灰オリーブ Hue7.5Y5/2	灰オリーブ Hue7.5Y5/2	堅緻	回転ナデ	回転ナデ	—	—	—	—	—	17
	7		土製品 土錘	4.6	1.3	1.1	黒褐 Hue10YR3/1	—	良	ナデ	—	—	微 小	—	—	—	13
	8		土製品 土錘	5.0	1.7	1.6	灰黄 Hue2.5Y7/2	—	良	ナデ、指オサエ	—	—	微 小	—	—	—	14
	9		土坑墓 2	銅製品 銅錢	3.0	3.7	1.6	—	—	—	—	20.30 g		7枚銹着周間に有機質付着。			31
	10		土坑墓 4	銅製品 銅錢	2.5	2.7	0.8	—	—	—	—	3.55 g		紙と思われるものにくるまれている。			33
第10図	11	土坑墓 4	銅製品 銅錢	2.3	2.3	0.1	—	—	—	—	—	1.69 g		繊維付着			32
	12		銅製品 銅錢	5.7	3.5	—	—	—	—	—	—	—		棺?の木質に付着。			34
	13		銅製品 銅錢	2.6	2.8	0.7	—	—	—	—	—	14.45 g		5枚銹着			35
	14		銅製品 銅錢	2.6	2.6	0.3	—	—	—	—	—	5.83 g		2枚銹着			36
	15		銅製品 銅錢	2.5	2.4	0.2	—	—	—	—	—	2.83 g		有機質付着			37
	16		土坑墓 5・6	陶磁器	—	(12.0)	—	オリーブ灰 Hue2.5GY7/1	オリーブ灰 Hue2.5GY7/1	堅緻	回転ナデ	回転ナデ	—	—	—	施釉	22
	17		土坑墓 須恵器 壺	(12.8)	—	—	灰 Hue5Y6/1	灰白 Hue5Y7/2	堅緻	回転ナデ	回転ナデ	1 僅	—	—	—	—	15
	18		包含層 縄文土器 深鉢	—	—	—	にぶい黄褐 Hue10YR5/4	にぶい黄褐 Hue10YR5/4	良	ヨコナデ	ヨコナデ、指オサエ	2 多	1 少	—	~2mmの砂粒多く含む	4	
第12図	19	地下式 埋土	縄文土器 深鉢	—	—	—	にぶい黄褐 Hue10YR5/4	にぶい黄褐 Hue10YR5/4	良	ナデ	ナデ、指オサエ	微 多	2 少	—	—	3	
	20		縄文土器 深鉢	—	—	—	黄褐 Hue10YR4/6	にぶい黄褐 Hue10YR5/4	良	ナデ	ナデ	微 多	1 多	—	—	2	
	21	地下式 埋土	縄文土器 深鉢	—	—	—	明黄褐 Hue10YR6/8	明黄褐 Hue10YR6/8	良	ヨコナデ	ヨコナデ	微 多	1 少	—	—	1	
	22	遺構外	土師器 高壺	—	—	—	橙 Hue7.5YR7/6	にぶい橙 Hue7.5YR7/4	良	ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ、指オサエ	5 僅	微 僅	—	—	11	
	23	ピット 5	土師器 皿	(10.6)	(3.8)	1.3	にぶい黄褐 Hue10YR7/4	浅黄橙 Hue10YR8/3	良	回転ナデ	回転ナデ	1 微	—	—	—	9	
	24	ピット 15	磁器 小杯	(6.0)	—	—	灰色 Hue5GY8/1	明オリーブ灰 Hue2.5GY7/1	良	ロクロ目	ロクロ目	—	—	—	—	19	
	25	ピット 4	磁器 碗	(10.4)	—	—	明緑灰 Hue7.5GY8/1	明緑灰 Hue7.5GY8/1	良	ロクロ目	ロクロ目	—	—	—	—	18	
	26	ピット 6	磁器 碗	(14.4)	(5.8)	(4.0)	明緑灰 Hue10GY8/1	明緑灰 Hue10GY8/1	良	ロクロ目	ロクロ目	—	—	—	—	20	
	27	ピット 25	石器 紡錘車	3.5	2.8	1.7	—	—	—	—	—	—	—	—	砂岩	12	
	28	包含層	石器 剥片	5.6	1.6	0.6	—	—	—	—	—	6.35 g		頁岩			29
	29	ピット 15	石器 剥片	5.9	3.9	1.6	—	—	—	—	—	30.89 g		頁岩			27
	30	包含層	石器 剥片	4.1	2.6	0.6	—	—	—	—	—	3.86 g		黒曜石			28
	31	地下式 埋土	石器 磨石	10.7	10.2	6.3	—	—	—	—	—	960 g		砂岩			24
	32	地下式 埋土	石器 敲石	11.4	5.3	3.0	—	—	—	—	—	240 g		砂岩			23

\*胎土はAが宮崎小石、Bが長石・石英、Cが輝石・角閃石、Dが雲母を示す。

法量は、土製品・石器・金属製品の場合には、口径=長さ、底径=幅、器高=厚さを示す。

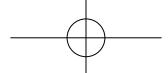
## 第 IV 章 まとめ

今回の調査は、老人福祉施設の建設にともない実施された事前の発掘調査である。調査地は、宮崎市街地北西部の垂水台地から、市内を貫流する大淀川に向かって南に突き出した舌状の丘陵端部に位置している。当地はその眺望の良さ、大淀川を利用した河川交通や宮崎平野を南北に通交する陸路の結節点にあたることから、宮崎市内でも最も埋蔵文化財包蔵地が密集する地域である。現在では、その丘陵南端部付近を一括して、「下北方遺跡群」としている。以下で今回の調査成果を概観し若干の検討を加えてまとめとしたい。

まず最も注目されるのが、地下式横穴の存在である。調査地が所在する下北方町には前方後円墳、円墳、地下式横穴からなる下北方古墳群が存在する。このうち、地下式横穴はこれまでに25基が確認、調査されており、宮崎平野部における地下式横穴の要素を知る上で重要な情報が蓄積されている。下北方地下式横穴群の特徴として、「大型で妻入りの玄室構造を持ち他に比して豊富な副葬品を持つ一群」と「小型で平入りの玄室構造を持ち、副葬品が少ない一群」に分類でき、これらが地下式横穴群造営開始時期から並存していることが挙げられる。このことと、地下式横穴の構築位置の違いから、下北方地下式横穴群では地下式横穴に明確な階層差が存在していることが指摘されている（西嶋2010）。

今回確認された下北方第22号地下式横穴は、玄室が妻入り構造で、平面形態が台形状、奥行きが3.4mと大型の地下式横穴である。この規模は、これまで下北方地下式横穴群で確認されている地下式横穴の中でも2番目の規模を誇る。下北方地下式横穴群の中で最も規模の大きいものは、下北方第5号地下式横穴である。直径約25mの円墳墳丘下に構築されており、その玄室は妻入り長方形で奥行きが5.5mと地下式横穴全体の中でも最大級である。また、玄室床面全体に礫が敷かれていて、その中央には川原石によって屍床が構築されていた。副葬品も鉄製の武具、武器を中心に豊富な副葬品が出土した首長墓である。今回確認された下北方第22号地下式横穴は、玄室床面に礫敷が無いこと、やや規模が小さいこと、副葬品が、鉄刀、U字形鋤鋤先、刀子のみであったことなど、上記の第5号地下式横穴に比べると若干見劣りがするが、妻入り長方形の玄室構造が採用されていること、川原石により屍床が構築されていることなどから考えれば、下北方地下式横穴群の中でも最上位に近い階層の地下式横穴であると言える。また、現在は失われているが、下北方地下式横穴群においては、大型で妻入りの玄室構造をもつ地下式横穴は、全て墳丘下に構築されていることから、この下北方第22号地下式横穴にも本来は墳丘がともなっていたものと推測できる。墳丘形態や規模に関しては判然としないが、おそらく円墳であったのではないかと思われる。

地下式横穴のほかにも、いくつかの遺構、遺物が確認された。今回の調査でもっとも多く確認されたのが、近世の遺構と遺物である。中でも、土坑墓は7基確認された。土坑墓は、方形、長方形の平面形態で、銅錢が主な出土遺物である。いずれも木製の棺が採用されていたようであるが、土坑墓4のみは蝶番構造による開閉装置を備えた木箱のような木製容器がもちいられていた点が注目された。特別な棺であったのか、何らかの木製容器の転用かについては判然としない。土坑墓1では、土層の堆積状況から木製で円形の棺が用いられていたことを判断する



ことができた。桶形の木棺が使用されていたものと思われる。掘立柱建物は2棟確認された。この2棟の掘立柱建物は切り合い関係にあり、掘立柱建物2自身も柱掘方の状況から建て替えなどが想定できる。また、下北方丘陵の東端付近、現在の大宮中学校がある場所には、近世に延岡藩の代官所が置かれていた。また、下北方丘陵の各所では、これまでにも多くの近世の遺構が確認されている。今回の調査でも改めて、近世段階の下北方丘陵において、活発な人々の生活があったことが理解された。当丘陵が、代官所を含め、近世段階でも宮崎市域で重要な位置を占めていた地域であることは間違いない、今後その様相について検討をおこなっていかねばならないだろう。

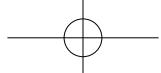
また、これまで下北方丘陵の縁辺部付近での調査において、土地を大きく改変した痕跡が認められていたが、今回の調査地においてもこの土地改変の痕跡が認められた。今回調査地は、造成時の地表面からA T層近くまで大きく土が掘削されており、その上層に厚く暗褐色の埋立土が堆積していた。本来堆積しているはずの土層が大きく掘削され、その上に暗褐色の埋立土が堆積するという状況は、丘陵の他地点で確認された土地改変のあり方と共通している。このような、近世段階におこなわれたと見られる、いったん土地を大きく削っておきながらその部分を暗褐色土で埋め立てるという所作の理由がこれまで判然としなかった。しかし、今回の調査で確認された近世の遺構について見てみると、埋立土を除去した地山面上からも一定の深さをもつもの、あるいは非常に浅いものが存在していることが認められた。このことは、上記のような掘削と埋立は一時におこなわれたものではなく、まず平坦面を確保するために土地の掘削造成をおこない、一定期間の後に、そこを埋め立てて新たな生活面を形成するという段階的な埋め立てがおこなわれていたことを示唆しているのかもしれない。下北方丘陵における大規模な土地改変については、その時期、規模、理由について今後もさらに検討を重ねる必要がある。

#### 《参考文献》

- 石村友規編2012『宮崎市内遺跡発掘調査報告書』宮崎市文化財調査報告書第89集 宮崎市教育委員会  
魚津知克2003「曲刃鎌とU字形鍬鋤先—「農具の画期の再検討—」『古墳時代中期の諸様相』帝京大学山梨文化財研究所研究報告第11集 帝京大学山梨文化財研究所  
沢田むつ代2008「古墳出土の鉄刀・鉄剣の柄巻きと鞘巻き—織物などの種類と仕様—」『MUSEUM』617号 東京国立博物館  
豊島直博2010『鉄製武器の流通と初期国家形成』 執筆  
西嶋剛広編2010『下北方塚原第1遺跡』宮崎市文化財調査報告第78集 宮崎市教育委員会



調査区周辺空撮写真（写真左下の森は下北方11号墳）



図版 1



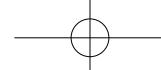
上：調査区空撮写真

(天が南)

下：調査区近景

(南西から)



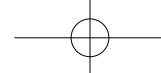


図版2



上：下北方第22号地下式  
横穴全景（南から）  
下左：玄室土層堆積状況  
(南西から)  
下右：竪坑土層堆積状況  
(西から)

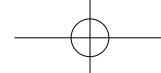




図版3



上段：礫床全景（東から）  
下段左：礫床全景（南から）  
下段右：遺物出土状況（上：鉄刀、下：U字形鍬鋤先）



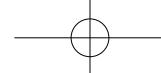
図版4



1



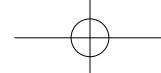
左：下北方第22号地下式横穴出土鉄刀、右上：同出土U字形鍬鋤先  
右中：鉄刀把部分二本芯並列コイル状二重構造糸巻、  
右下：U字形鍬鋤先V字溝部分



図版5



上：土坑1全景（南東から）  
下左：土坑1土層堆積状況（南から）  
下右：土坑1出土遺物



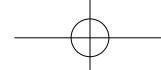
図版6



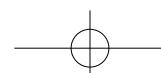
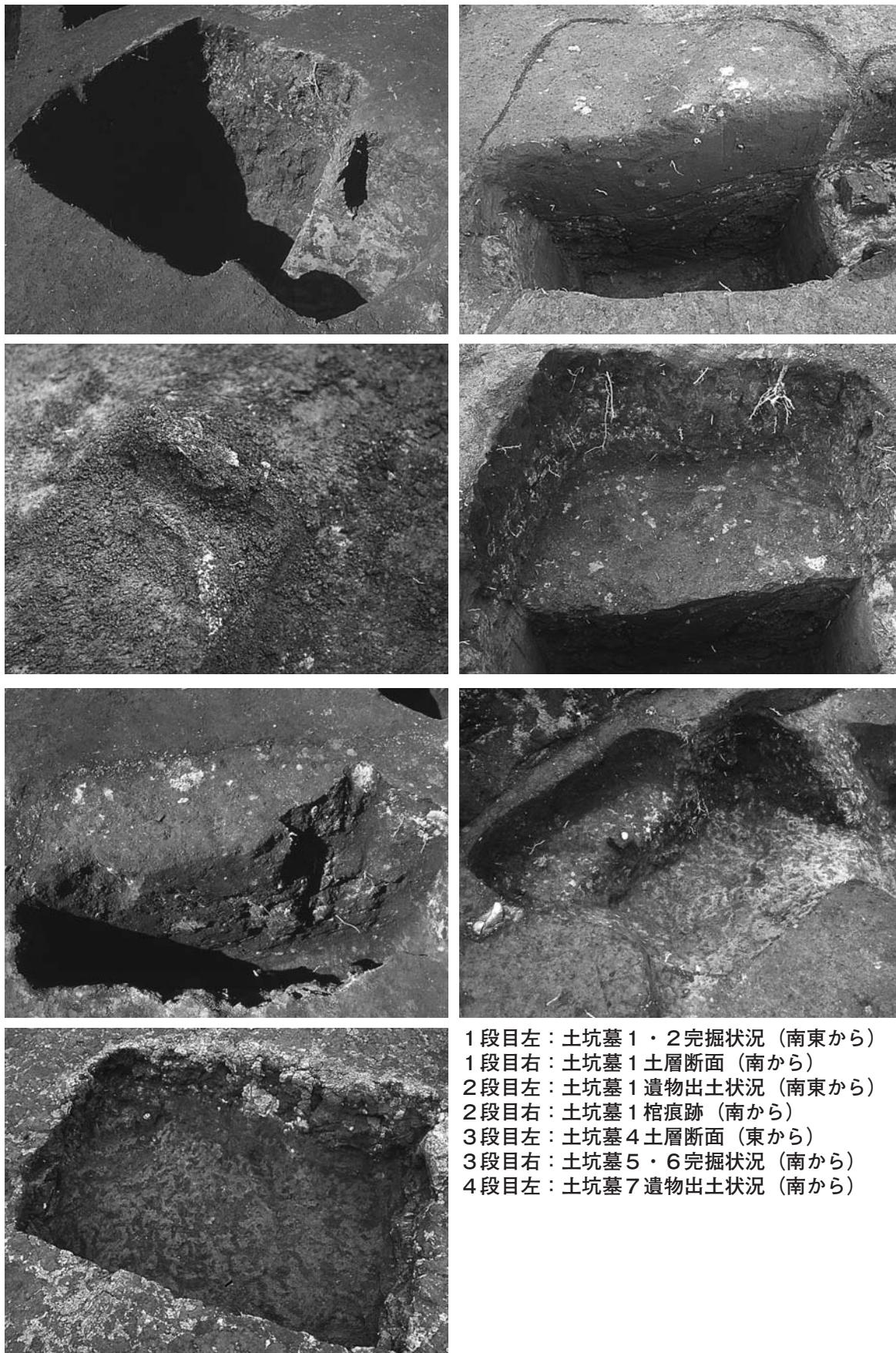
掘立柱建物1全景（西から）

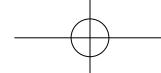


掘立柱建物2全景（西から）



図版7

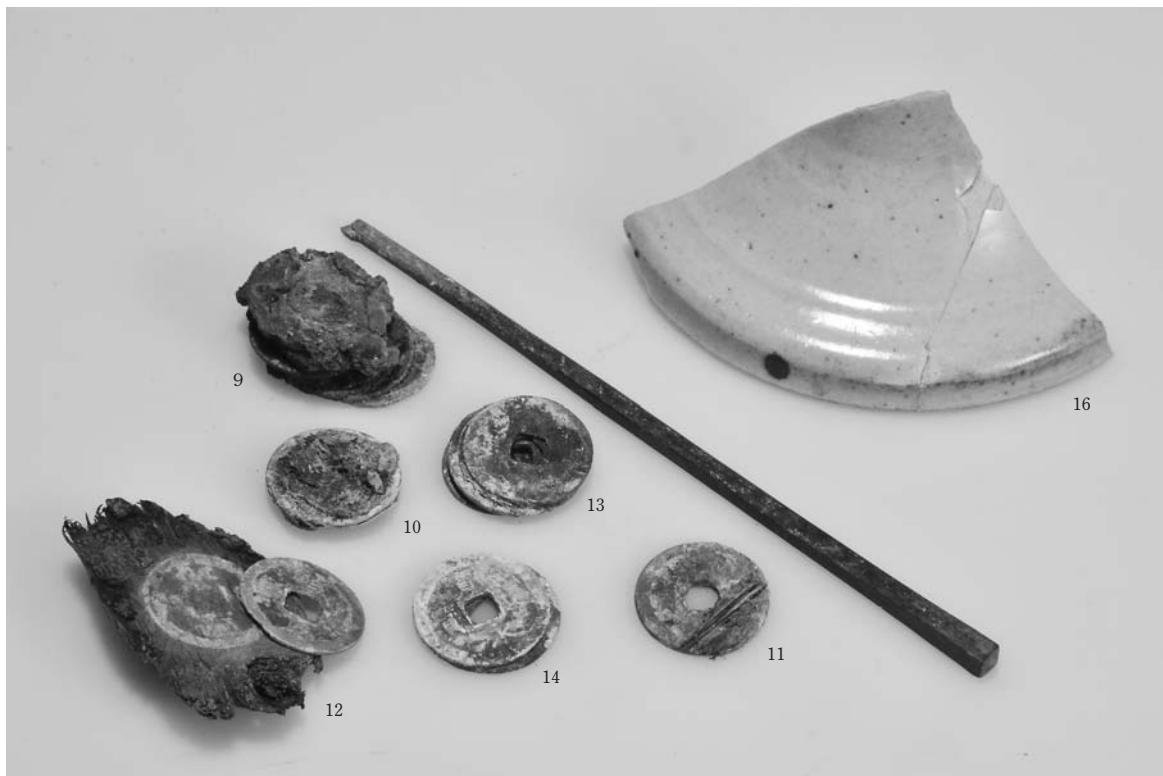




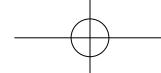
図版8



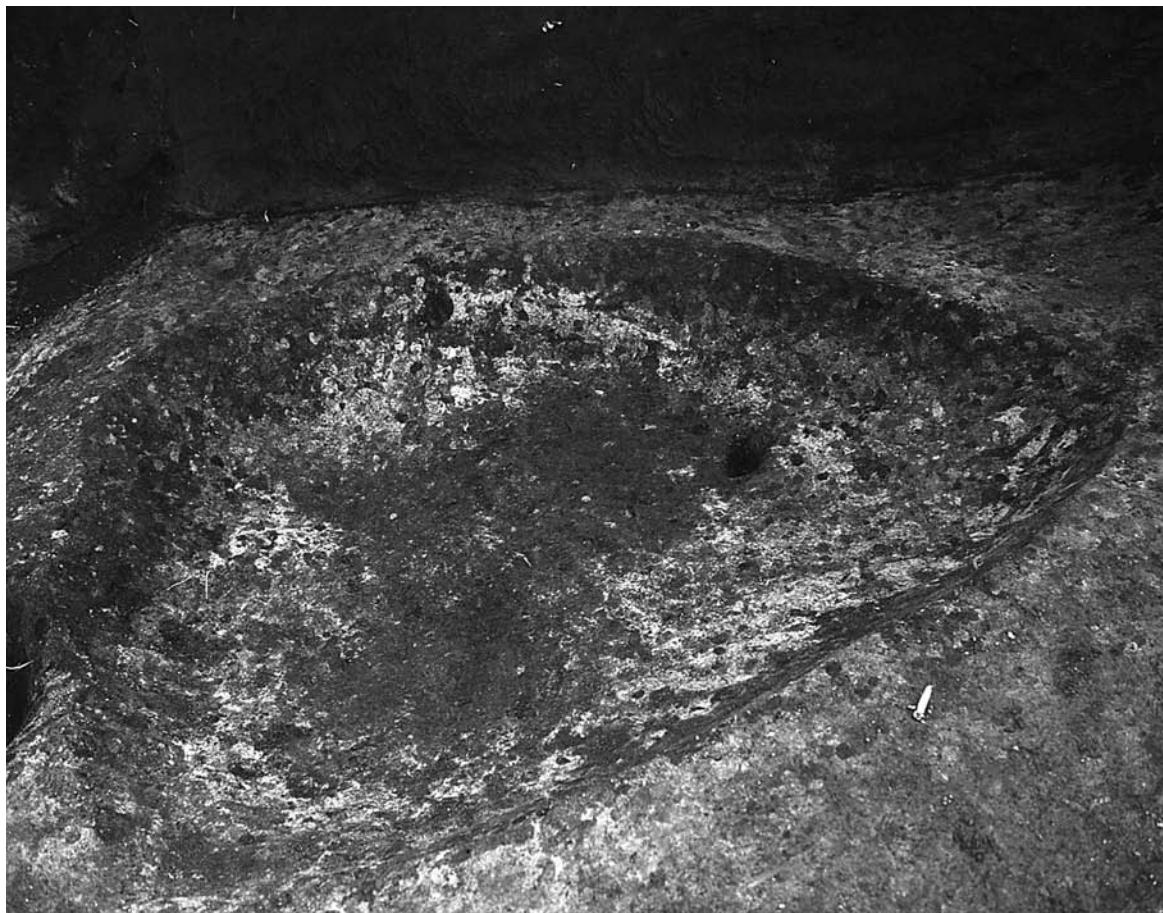
土坑墓4 遺物出土状況（東から）



近世墓出土遺物



図版9



土坑2完掘状況（北から）



その他の出土遺物

## 報告書抄録

ふりがな	しもきたかたつかばるだい3いせき						
書名	下北方塚原第3遺跡						
副書名	老人福祉施設建設とともになう埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名	宮崎市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第99集						
編著者名	西嶋 剛広						
編集機関	宮崎市教育委員会						
所在地	〒880-0805 宮崎市橘通東1丁目14番20号 TEL (0985) 21-1836						
発行年月日	2014年3月31日						

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )
しもきたかたつかばる 下北方塚原 だい3いせき 第3遺跡	みやざき し シモキタカタツカラ 宮崎市下北方町 つかばる 塚原		21-079	31° 56' 30"	131° 24' 36"	H23. 2. 9 ～ H23. 3.24	471m <sup>2</sup>

調査原因	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
老人福祉施設建設	散布地	古墳	地下式横穴	鉄刀 U字形鍬鋤先	妻入り構造で規模の大きな地下式横穴が検出された。

要約	調査地は大きく削平を受けていたが、古墳時代中期の地下式横穴をはじめ、中近世の遺構や、縄文早期の土器が確認された。地下式横穴は妻入り構造で規模の大きい玄室を持ち、川原石による屍床が設置されていた。
----	---

宮崎市文化財調査報告書 第99集

下北方塚原第3遺跡

老人福祉施設建設にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書

2014年3月

発行 宮崎市教育委員会